
ゲームキャラ達よ、現代を生き抜け！

p p

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームキャラ達よ、現代を生き抜け！

【Nコード】

N4462A

【作者名】

pp

【あらすじ】

ゲームキャラ達が、普通の人間のように生活していたら・・・？冒険物のゲームキャラが、戦隊物のゲームに転職したら・・・？ヒロインが携帯電話を持っていたら・・・？ゲームと現実を雑ぜてみました♪何でもありのゲームの世界での、ドタバタ小説です。

ゲームの世界へようこそー喫茶店でー

ここはゲームの世界。ゲームのキャラなら、誰でも出入り自由になっっている。

この世界は7つのフィールドに分かれていて、キャラのプロフィールにより、行くことのできる所が制限されている。

第1フィールドである『ライツ・カフェ』は、正しい心の持ち主が集まる喫茶店だ。

今日も客が来ている。戦士のバトン、ヒロインのフェアンヌ、村人のニヒトの3人だ。

3人ともゲームは違うが気が合い、よくここで楽しい時間を過ごしている。

フェアンヌ：「ねえニヒト、今日は何か事件あった？」

ニヒト：「今のところはないなあ。」

バトン：「俺はあるぜ。」

フェアンヌ：「あなたは戦士なんだから、事件があって当たり前じゃない。」

バトン：「そういう意味じゃないよ。」

フェアンヌ：「じゃあ何だって言うのよ。」

ニヒト：「喧嘩するなって。」

フェアンヌ&バトン「ニヒトとは関係ない！」

リンリン・・・

出入り口のベルが鳴った。他の客が来たのだ。入って来たのは、変身する女戦士のいちごと、みかんだった。

バトン：（嫌な奴に合っちゃったなあ。）

ニヒト：（あの人達といると、旅人に教えなければいけない情報を

忘れちゃうよ。」

フェアンヌ：「ちよつと失礼。」

なぜか、フェアンヌは一度席を外れた。

ピロリロリ〜ン

バトン&ニヒト：「何だ!？」

メッセージ：『いちごのメル友が増えた!』

ピロリロリ〜ン

メッセージ：『みかんのメル友が増えた!』

ニヒト：「これは一体・・・?」

バトン：「つまり、あいつらのゲームは、メル友がステータスに係するんだろ?」

ニヒト：「ほう。」

その直後、席を外れていたフェアンヌが戻って来た。

フェアンヌ：「いちごとみかんがメル友になったよん♪」

バトン&ニヒト：（こいつの仕業かい!）

フェアンヌ：「バトンとニヒトもメル友になつてもらえば?」

バトン：「誰になるか!」

ニヒト：「大体、貧乏な設定にされた僕が、携帯電話やパソコンを持っているわけないだろ!」

フェアンヌ：「だったら私が買ってあげる。」

バトン&ニヒト：「いらない!」

フェアンヌ：「遠慮しなくてもいいのに。」

バトン&ニヒト：「いらないってば〜!」

フェアンヌ：「必殺! プリティービーム!」

メッセージ：『フェアンヌはプリティービームを発射した。』

バトン：「うぎゃああ！」

メッセージ：『快心の攻撃。』

ニヒト：「ヒイイ……。」

ダダダダ……

リンリン……

メッセージ：『ニヒトは逃げ出した。』

フェアンヌ：「バトン捕獲♪あなたはいつも旅をしているから携帯電話ね。」

バトン：「あんな（いちご&みかん）奴とメールしたくない！誰かタスケテ。」

メッセージ：『バトンは携帯電話を手に入れた。』

このようなことが起きるため、ジャンルの違うゲームを雑ぜるのはやめたほうが良い。

ゲームの世界へようこそ――喫茶店で――（後書き）

あくまでも、この小説に登場するキャラクターは、すべて私のオリジナルです。

買い物するなら、強くなりたい！(前書き)

前回とキャラが変わります。でも、どのキャラもどこかで再登場するはずです。・・・だぶんね。

買い物するなら、強くなりたーい！

ここは、第2フィールドの『ザコ専門店』だ。ゲーム中でザコキャラとして扱われているキャラの、グッズが売っている。

敵キャラだけでなく、弱い味方も入ることのできる、2階建てのショップだ。

今回ここに買い物に来たのは、ロールプレイングゲームの敵キャラ、ムシケーラと、同じゲームの味方キャラである、白影くんだ。

他にもお客はたくさんいる。しかし、敵と味方が一緒に来店するのは珍しいので、この2人を観察してみよう。

白影くん：（今日で僕は、ザコからおさらばなんだあ。）
ムシケーラ：（喜んでもらえるといいな。）

白影くんは、ザコ専門店に来るのが初めてだ。しかし、ムシケーラはこの常連である。

メッセージ：『第2フィールド ザコ専門店』

ムシケーラ：「ここだよ。」

白影くん：「わあい！着いた着いた！」

2人は1階から、順番に見ていくことにした。

メッセージ：『1階フロア おしゃれグッズ』

白影くん：「待つてましたあ！」

ムシケーラ：「白影くん、このコースチュームがオススメだよ！」

ムシケーラは、色の3原色のうちの、どれか1色だけの使われたコースチュームのコーナーを指差した。

白影くん：「へえ、面白いなあ。」

（無色の僕には、ちょうど良いな！）

ムシケーラ：「他にもたくさんあるから、ひととおり見てから決めるといいよ。」

メッセージ：『白影くんの現在の所持金＝500リン』

『ムシケーラの現在の所持金』1000リン』
白影くん：「ムシケーラくん、ザコのわりにはお金持ちだね。」
ムシケーラ：「ハハハハ・・・。(汗)」

結局何も買わずに、2階に来た。

メッセージ：『2階フロア ザコキャラ用アイテム』

ムシケーラ：「ここは僕のお気に入り！」

白影くん：「どんな物が売っているの？」

ムシケーラ：「見ればわかるよ。」

目の前にある、首輪のような物に気を引かれた白影くん。

白影くん：「?????補助メッセージ！」

メッセージ：『ザコネックレス』ザコのためのネックレス』

白影：「それは状況と外見だけでわかるわ！」

ムシケーラ：（メッセージもザコ!?）

バキッ！

頭にきた白影くんが、ゲームを殴った。

ムシケーラ：（どうやって殴ったんだ!?）

白影くん：「痛あつ!!!!自分のデータの所殴っちまった！」

ムシケーラ：（マイデータ!?ていうか、痛いのか!?）

メッセージ：『白影くんのHP』500↓100』

白影くん：「ヤバッ！」

ムシケーラ：（しょせん、ザコはザコか・・・。）

そろそろ本題に戻ろう。

白影くん：「補助メッセージ！今度はきちんとしろよ。（怒）」

メッセージ：『ザコネックレス』つけるとステータスが下がり、外見もださく見える一石二鳥のネックレス』

白影くん：「え!?ステータスが下がるの？」

ムシケーラ：「当たり前だよ。ザコは弱くなきゃ！」

白影くん：「ガーン！！！！！」

メッセージ：『白影くんはその場に崩れ落ちた！』

『ムシケーラは白影くんと戦いに勝利した！500リン手に入れた。』

ムシケーラ：「ワイ！500リンゲットお！」

ザコでも頭を使えば、大量に¥を稼げます・・・。

ちなみに、ムシケーラが持っていたお金はすべて白影くんから取ったもの。（本人はわかっていない）

買い物するなら、強くなりたい！」（後書き）

気づいた人も多いかもしれませんが、白影くんがノックアウトされた時にムシケーラが手に入れた500リンは、彼の所持金です・・。

気づかなかった方は、ぜひどこか探してみてください。

ヒント＝1階シーンの終わり

強き者達、仲間とヒロインとライバルと（前編）（前書き）

今回は2話にわたって、1つの話を作ります。読むのが飽きたと言わず、次回作を気長にお待ちください。

強き者達と仲間とヒロインとライバルと（前編）

ここは第3フィールドの『悪役の城』。フィールド自体が城で、広さは東京都ほど。

500階建てで空気に問題がありそうだが、ゲームの世界では生きるために酸素は必要ない。

城にはザコから帝王まで、いろいろな強さのキャラが終結しているが、ここでは皆平等である。

ゲームの世界では、悪役も悪いのは役がらだけになっている。

城の管理人とゲームのボスである『デット・ゼウス』は、ゲーム界1か2といわれる強さを誇っている。

唯一のライバルは無敵のヒーローと呼ばれる、『バルデン』である。彼は主人公としてデット・ゼウスを倒しに行く設定のキャラで、15歳。愛称は『バル』だ。

男子には『強くてカッコいい』憧れの的になっていて、女子には『イケメン』だともてモテである。

ある日の朝。

バルデン「ふあゝ。」

バルデンが目を覚ました。（家ではごく普通の服装をしている。）

バルデン「昨日の夜は、僕を何回使ったのかな？メッセージ！」

メッセージ「使用者〓32名 ゲームオーバー回数〓13回 ゲームクリア回数〓9回」

バルデン「いつもよりいい成績だなあ。」

ミント「俺がアイテムをサービスしてあげたからな！」

ミントとは、バルデンの飼っている話せるオウムだ。ゲームでは、

バルデンにアイテムを与えて助ける役目をしている。

バルデン「システムをハックして？そんなの無理だろう。今日はちよつと出かけないか？」

ミント「仕方がないなあ、行つてやるか。」

バルデン「だったら1人で行くから、留守番しててくれよな。」

ミント「ぜひ行きますとも！ええ、楽しみにございます！」

バルデン「最初っから素直にそう言えよ！」

一方、悪役の城の50001号室（管理人室）では……。

ジーナ「ゼウス様、今日は私が城の管理をしますので、どこかへ外出なさつてはいかがですか？」

ジーナは、デット・ゼウスの手下だ。ゼウスにとっても忠実で、ゲームでもそれに変わりはない。

デット・ゼウス「では、お言葉に甘えて……。」

ジーナ「レストランの消灯時間までに帰つて来ていただければけっこうです。」

デット・ゼウス「それでは行つて参るぞ。」

そしてデット・ゼウスはコウモリに変身し、住人に見つからぬように城から飛び立って行つた。

バルデンとミントがやって来たのは第4フィールド。強い人々のための、『強者街』だ。

強者街には善悪関係なしに入ることができるため、大切な情報交換

の場でもある。

たくさんの装備品も売っているため、冒険者やボスには欠かせない街だ。

バルデン「ミント、女戦士に見とれてる場合じゃあないよ。あいつら、本当は恐いんだぞ。」

ミント「俺には死んでもそう思えない！」

バルデン「ここにバカが一人……。色気攻撃にだまされるなよ。」

ミント「知らん！俺は好きなことがしたいんだ！」

バルデン「焼き鳥にされても知らないぞ！」

ミント「ふん、そんなもの誰かなるか！」

メッセージ「ミントと別れますか？」

バルデン「はい。」

ミント「こんな奴とは一緒にいられないね！」

バルデン「ミントに人間のDNAを組み込むんじゃなかった。」

メッセージ「バルデンはミントと別れた。」

メッセージ「第1ステージ システムの故障を食い止める！」

バルデン「げっ、ミントの奴、もしかして本当にシステムをハックしたのか！？」

いつもはこんな表示は出ない。というより、このような表示はゲームの世界ではなく、ゲームのなかで出るものだ。

ミントは元はオウムだが、脳に人間のDNAを組み込まれ、体の一部は機械が入っている。（バルデンが知っているのは、くちばしと羽だけ）

そして、体に入っている機械のおかげで、ミントは簡単なメカはハックすることができるのだ。

そしてミントのほうはというと……。

メッセージ「第1ステージ システムの故障を直せ！」
ミント「ん？システムが故障！？誰がこんなことを！」

バルデン&ミント「まあいい、やるっきゃない！」

そうして二人は旅立った。そしてその後、デット・ゼウスが悲惨な目に遭うとは、誰も知らなかったのである。

続く

強き者達と仲間とヒロインとライバルと（前編）（後書き）

後編では、バルデンとデット・ゼウスが、ばったりと出会っています。そのせいで、商店街が大変なことに！

強き者達と仲間とヒロインとライバルと（後編）

バルデンは基本である聞き込みを始めた。

村人「何者かがシステムを破壊している。私は何もわからないが、この世界の長なら知恵を貸してくれるだろう。」

バルデン「長はどこに？」

村人「強者街のどこかか、第1フィールドの『ライツ・カフェ』の近くにある家の中だよ。」

バルデン「ありがとう。」

長「わしを探しているのかね？」

村人「長！ちょうど良いところに！」

バルデン「この方が長ですか？」

長「いかにも。システムのことじゃろう？犯人は近くにおる。」

バルデン「えっ？」

長「犯人は、ひととき強い力の持ち主じゃ。下手に手出しをするでないぞ。」

バルデン「わかりました。」

（それなら、ミントではないな。・・・もしかしたら、デット・ゼウスか！？）

長「気をつけるのじゃぞ。」

バルデン「はい、ありがとうございます！」

バルデンはシステムの管理塔がある強者街の外れに向かった。犯人は、ここにいるはずなのだ。

バルデン「誰がいるだろう！？」

その声に反応するかのように、何かが動いた。

バルデン「その姿は・・・！」

デット・ゼウス「バルデンではないか。こつちの世界で会ったのは何年ぶりだろうか。」

バルデン「ふん、6年前だよ。」

デット・ゼウス「でつかくなって。」

バルデン「お前が年をとらないだけだろ。」

デット・ゼウスは、自分に不老の呪いをかけたのだ。そのため、今ではバルデンと同年齢だ。

バルデン「それより、俺はシステムの破壊を食い止めるためにここに来たんだ。さつさとどいてもらわないと、こつちが困る。」

デット・ゼウス「待て、俺はそんなことやっていない。証拠に武器さえ持っていないだろう。」

バルデン「ごまかしても無駄だ！」

メッセージ「バルデンの攻撃！」

バシッ

デット・ゼウス「うつ・・・。」

メッセージ「効果は抜群だ！」

2人は外に出て、戦いを始めた。周りにいた女戦士が悲鳴をあげた。

デット・ゼウス「~~~~~」

メッセージ「デット・ゼウスはウィンディを使った」

デット・ゼウスの周りに強風が吹き、人や店もろともバルデンを吹き飛ばした。

バルデン「つつう！・・・。」

バルデン「はあああああ！」

メッセージ「バルデンは攻撃力を高めた。」

バルデン「俺が特訓を重ねて編み出した技だ！」

デット・ゼウス「待て！私はこのとおり無防備だ！それにこの世界では悪さはいけない！」

バルデン「じゃあ何でここにいるんだ！」

メッセージ「デット・ゼウスは逃げ出した。」

バルデン「逃がしはしねえ！」

デット・ゼウスは強者街の人通り多いところに逃げ込んだ。

バルデン「くっそー！あいつ、どこへ逃げたんだ？」

そこにちょうど情報屋が現れた。

バルデン「すみません。ここに、俺と同じくらいで銀髪の青年が通りかかりませんでしたか？」

情報屋「知っているよ、その情報はただでやろう。右の通りをまっすぐに行き、2つ目の角を左だ。」

バルデン「どうも。」

もちろんバルデンは情報屋の言った通りに行った。それがデット・ゼウスの計略だとも知らずに。情報屋はデット・ゼウスが変身したものだ。そんなことを知らないバルデンは、とくにその場から消え去っていた。

デット・ゼウスがほっと一息ついたとき、背後から何かが忍び寄ってきた。

ドカッ

デット・ゼウスの後頭部に、バルデンのとび蹴りが決まった。そのせいで、デット・ゼウスはあっけなく気絶してしまった。

バルデン「どうせそんなこったろうと思ったさ。俺はお前と違って、頭も成長してるんだ……。」

その声は異様にさびしげであった。

一方その頃のミントは――

ミント「んゝ、システムの管理はすべてここで行われているんだよな！」

ガチャガチャ・・・ガチャガチャガチャ・・・
ドーン

ミント「ゲホッ！誰だよ。こんな所に超小型爆薬をしかけたのは！」

ミントのくちばしがわずかにこげていた。

ガチャガチャガチャ・・・

メッセージ「第一ステージ クリアー」

ミント「まあ、ざっとこんなものだな。」

そう言って、さっさと商店街に出て行った。

ミント「バルデン！デット・ゼウス！」

システムの管理塔の前では、2人が争っていたのだ。（デット・ゼウスは気絶していたが）

バルデン「ミント、コイツがシステムをハックした犯人だ！」

ミント「そいつじゃあない！原因はガキが悪戯でつけた爆薬とかのトラップだ。歯車が引つかかっていたんだ。」

バルデン「え……。」

デット・ゼウス「……！」

バルデン「気がついたか。さっきは俺の間違いだった。すまねえな。」

デット・ゼウス「……。」

バルデン「おめえもいい加減大人になれよ。昔は俺にとっちゃあ大男だったのによ！」

バルデンはゲームの新作が出るたびに、デット・ゼウスの成長が止まっているせいで、倒すときの苦勞が減っているような気がしていたのだ。昔から同じゲームの宿敵として、それはとてつもなく許しがたいことだったのだ。

デット・ゼウス「わかったよ。今、呪いを解くから。」

デット・ゼウス「~~~~~」

メッセージ「デット・ゼウスにかかっていた呪いが解けた！」

もう、そこには15歳のデット・ゼウスの姿はなかった。ただし、そのかわりに21歳のデット・ゼウスが立っていた。

デット・ゼウス「フッ。」

これで満足だろうとばかりに、デット・ゼウスは立ち去ろうとした。しかし、それではすまなかった。

いちご&みかん「キヤー！あの人かっこいい！」

2人の目線の先には、デット・ゼウスがいた。

いちご&みかん「メルアド教えてえ〜！」

デット・ゼウス「ぎゃああああ！！」

こうしてデット・ゼウスは、レストランの閉館時間ギリギリまで城へ帰ることができなかった。

END

強き者達と仲間とヒロインとライバルと（後編）（後書き）

バルデンもデット・ゼウスも、私のイメージ的には両方イケメンです。またいつか登場させたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4462a/>

ゲームキャラ達よ、現代を生き抜け！

2010年10月9日05時24分発行